

絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践 ～「みんなで力を合わせて、たいようをとりのどすぞー！」～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
堤乙華、立山凜、中井春菜、桑野夏凪
原田雅、塩山花央、江頭柚希、青柳光莉
田中くるみ、宮崎穂乃香、平川千愛凜
山崎麻奈加、二井田直央

1. 実践の概要

題材とした絵本：『王様と九人の兄弟』
文（訳）：君島久子 絵：赤羽末吉 出版：岩波書店 （第79刷）

実践のタイトル：「みんなで、力を合わせて、たいようをとりのどすぞー！」

実践準備の担当：

総合責任者（堤乙華）
脚本（堤乙華、二井田直央）
大道具（全員）
音楽（宮崎穂乃香）
記録（堤乙華、二井田直央）

実践時の担当：

魔女（堤乙華）
子ども（塩山花央、江頭柚希）
あつがりりんちゃん（立山凜）
さむがりなーちゃん（桑野夏凪）
まねっこちーちゃんひーちゃん（平川千愛凜、青柳光莉）
くいしんぼうみーちゃんまーちゃん（原田雅、山崎麻奈加）
キラキラキキちゃんララちゃん（田中くるみ、中井春菜）
ナレーション（二井田直央）
音・演奏（宮崎穂乃香、塩山花央、江頭柚希）



2. 題材について

この話は、九人にそれぞれにそなわった能力があり、能力を怖がって次々無理難題をふっかける王さまに、きょうだい能力を生かしてたちむかい、ひどい王さまをやっつける話だ。この絵本を題材として、能力を自分達で考えてオリジナルで能力を変えてみたり、また、倒す対象を「王様」ではなく「魔女」にする事で、「倒す・戦う物語」という事を子ども達にさらに伝わりやすく出来ると思った。

劇を進めていく中でも、能力に合わせて、子ども達に、語りかけて、きょうだい達と一緒に手を擦ったり、息を吹きかけたり、歌ったり踊ったり、パワーをめいっぱい送ってもらったりと、観客参加型を含んで物語を進めれるなどおもった。そして、観客(子ども達)にも協力して貰う事で、一体感が生まれ、演者と観客で作り上げる1つのストーリーがつけられるのではないだ

ろうか、と思いこの絵本を選択した。実際私達のグループの人数も11人と物語の内容的にも振り分けやすかったので、魔女役(王様)、きょうだい役、物語に入りこ見やすいように子ども役(音響)、ナレーション、ピアノに役割を分け、それぞれが役に配置でき、全体で劇に携わり、それぞれ役は違うからこそお互いが観る側に立ち、アドバイスをしあって改善を重ね、皆でひとつの劇を作る事も出来てよかったと感じた。

(執筆者：堤 乙華)

3.絵本の世界から遊びへの展開

王様と9人の兄弟の絵本を題材とした。

この絵本を題材とし、まず本を選ぶ際、どれが子どもたちがわかりやすいか、楽しめるか、一緒に参加することができるかを考えこの本を選んだ。

本の内容も劇でやったものとは少し、変更した。本の内容では兄弟たちのパワーの内容が理解しづらかったため、子どもたちにわかりやすいようアレンジを加えた。絵本の兄弟たちのパワーは、「ちからもち」「くいしんぼう」「はらいっぱい」「ぶってくれ」「ながすね」「さむがりや」「あつがりや」「切ってくれ」「みずくぐり」であった。私たちでもあまり分からないパワーがあったので子どもたちには難しいと話し合い、わかりやすいよう、「あつがり」「さむがり」「食いしん坊」「まねっこ」「キラキラ」と誰もがわかるパワーに変えた。この本では、弱い庶民が、権力者を打ち負かす、痛快なお話劇に取り組む内容になっていた所以我们たちは、9人の兄弟が悪い魔女を倒す内容の方が子どもたちも理解でき、一緒に取り組めるのではと考え内容を変更した。実際に取り組む際は、子どもたちが一緒に参加でき、一緒に楽しめるよう子どもたちの様子を見ながら行った。声掛けも、「ひとりじゃパワーが足りないから協力してくれる？」と問いかけを入れながら子どもたちの反応を観察しながら行った。子どもたちが参加しやすくなるように、身近な動作を取り入れた。また、客席に座っていてもできるように配慮した。あつあつパワーでは、寒い時は手を擦っているということから、手を擦ってあつあつパワーを集める活動にした。さむさむパワーでは、雪女など寒いと連想した時、「フー」と息を吐くこと行動が結びついたため、その動作を取り入れた。食いしん坊パワーでは名前の通りお腹を空かせてるから食べ物食べてパワーを集めることにした。まねっこパワーでは、兄弟と一緒に歌って手遊びをしてパワーを集めることにした。キラキラパワーでは、どのような活動にするのか悩んだが、皆で意見を出し合い、きらきら星の曲を歌うことでパワーを集めようと考えた。魔女も毎回登場する場所を変える演出を行い、子どもたちと一緒に魔女を探し、パワーでやっつけるということを行った。日常の動作や、日頃の様子ですることからアイデアをみつけ絵本を題材として内容を工夫して行った。

(執筆者：立山凜)



4.実践に際して大切にしたこと

子どもたちには、ずっと観ているだけではなくて、ステージに出ている8人兄弟とともに、1人や2人ではできないこともみんな協力して力を合わせるとできるということを経験してほしいと思った。そして、8人の兄弟と力を合わせて会場の子どものパワーも合わせて協力し魔女を倒すこと、兄弟と一緒にパワーを集めることを楽しんでほしいと思った。そのため、まずは兄弟が1人ずつパワーを当てて悪い魔女を倒そうとしたが倒せず会場

にきている子どもたちにパワーを集めてもらい、手伝ってもらい会場のみんで協力してたくさんパワーを合わせたことで悪い魔女を倒すというエピソードの流れにした。そこから兄弟が1人や2人ずつ出てきてパワーを集める際、席が広くはないので、子どもたちが席でもできる動きを考えて安全性に配慮した。具体的には、あつあつパワーを集めるために会場の子もたちに手を擦ってもらって手をあつあつにしてもらったり、さむさむパワーを集めるために口に手を当ててもらいふーふーしてもらうことで寒くしてもらったり、食いしん坊パワーを集めるために座ったまま会場のどこかにある食べ物を探してもらったり、まねっこパワーを集めるためにこぶたためききつねねこの歌を歌いながら手の動きを真似してもらい動物のまねをしてもらったり、きらきらパワーを集めるためにきらきら星を兄弟と会場のみんでその場で歌ったりなど会場の子もたちが安全にかつ、会場の全員が参加できるよう配慮した。検討したことは言葉遣いを子どもたちが分かりやすいように登場人物みんな女の子で普通は姉妹って言うけど分かりやすいように兄弟にしたり、パワーを当てる時「せーの！やー！」と言うことで子どもたちも一緒にパワーを当てやすいようにと言うようにした。そしてプレ幼教劇場では私たちが次に次に進めるので頭がいっぱいいっぱいだったけれど、当日は子どもたちと会話することを大切にしたい。たとえば、あつあつパワーのとき手を擦って子どもが「熱くなってきた」と言ったことに対してそれを拾って「熱くなってきたね」や、まねっこパワーのとき「こぶたためききつねねこの歌知ってる？」と聞いたとき子どもたちは「知ってる」「知らない」と言う子どもたちが居たら知ってると言った子どもには「じゃあ一緒に大きな声で歌ってね」や知らない子どもには「私たちの真似をしてね」など子どもが発言してくれていること、反応してくれていることを拾って子どもたちと触れ合うことを大切にしたい。

(執筆：平川千愛凜)



5.実践内容について

(1) 全体の構成

幕が空くとジングルベルのピアノの音が流れてきて2人の村の子どもたちがスキップしながら出てくる。ジャンケンしてあっち向いてホイをしたりして楽しそうにしている。左上には自分たちで作った太陽が吊るされている。背景は明るくて明るい世界のような感じである。すると、魔女がほうきに乗って出てくる。魔女は暗い町が好きで明るいのが大嫌いだ。魔法を使って太陽を奪うようにして吊るされている太陽が上にあがる。すると、段々暗くなっていく。魔女は喜んで出ていく。2人の子どもたちは暗くなって怖がり、困っている。

すると、8人の兄弟たちが出てくる。暑がり1人、寒がり1人、食いしん坊2人、まねっこ2人、キラキラ2人、それぞれ自分たちは力を持っている。泣いている子どもたちを助けるためにやってきた。8人の兄弟たちは自己紹介をする。そして魔女をやっつけるために8人の兄弟たちは魔女のお城に向かう。8人の兄弟たちは、魔女のお城に到着し、魔女を呼び出すと魔女が出てきた。魔女が出てきて8人の兄弟の一人一人のそれぞれのパワーを当てるが魔女には効かない。逆に魔法で倒されてしまう。8人の兄弟たちは（どうしよう）と考えていると1人の食いしん坊がいい事を思いついた。座っているお友達のを貸してもらおうという案を思いつく。そしてそれぞれの持っているパワーごとに劇を行う。まずはアツアツパワーだ。手と手を擦って摩擦を使って暑さのパワーをためるという技である。子どもたちも一緒に手と手を擦るよう促し暑さのパワーを一緒にためる。そして魔女にパワーを当てようとするが魔女が消えてしまう。兄弟と子どもたちみんなで魔女を探して見つけてパワーを当てる。だが、まだ魔女は倒れない。次にさむさむパワーだ。さむさむパワーは子どもたちに（ふーふー）として風を当てて寒くさせるパワーだ。みんなで何度も何度も（ふーふー）と風を当ててさむさむお姉ちゃんを寒くしてパワーをためる。するとパワーがたまり、魔女にパワーを当てようとする。だが、また魔女が居ないことに気付き子どもたちに探してもらおう。すると、魔女を見つけることができ、さむさむパワーを当てる。だがまだまだ魔女は倒れない。次に食いしん坊パワーだ。食いしん坊パワーは食べ物を沢山食べてお腹いっぱいになるとパワーがあつまる。すると、おにぎりとお菓子を食べた。だが、まだお腹いっぱいにならずどうしようと考えていた時に困っていたら子どもたちが大きいお肉を見つけてくれて見事お肉を食べることが出来、お腹いっぱいになって食いしん坊パワーが溜まった。食いしん坊2人組はパワーが集まり魔女にパワーを当てようとする。だが、またまた魔女がいない。魔女を探しているとステージの下の方から魔女が出てきた。その魔女に食いしん坊パワーを当てて魔女を弱らせることが出来た。でもまだまだ効かないようである。次にまねっこパワーだ。まねっこパワーは（こぶたぬきつねこ）の歌に合わせて手遊びをして真似をみんなですべてパワーを集めるというパワーだ。歌に合わせて手遊びをしてみんなでパワーを集めた。すると、魔女が出てきて鼻になにか付いている。何かと思ったら豚の鼻である。まねっこパワーが効いてきていて魔女が豚になりかけている。そこでまねっこ兄弟はスピードアップしてまねっこすることにした。スピードアップしてまねっこをすると魔女の耳に豚の耳が付き、完全に魔女豚になったのである。だが、魔女は（豚なんかじゃない！）と豚の鼻と耳を取って走っていく。まねっこパワーでもまだ足りなかったようだ。次は、キラキラパワーだ。キラキラパワーは（きらきら星）の歌を歌って魔女をキラキラにさせてパワーを当てる作戦だ。きらきら星を歌うということで兄弟たちみんなが出てきてみんなできらきら星を歌う。すると、太陽が左上から出てきて世界が明るくなりつつある。魔女が段々弱くなってきた。最後に兄弟たちは子どもたちと一緒にためてきたパワーを魔女に当てる。兄弟たちは、一人ひとりパワーを魔女に当てると魔女を倒すことが出来た。協力してくれた子どもたちと8人の兄弟のおかげで太陽を取り戻し、元通りの明るい世界に戻ることが出来た。すると、2人の村の子どもたちが



出てきて明るい世界に戻ったことを喜ぶ。すると（さんぼ）のピアノの音楽が流れてきてみんなでさんぼを歌って幕が閉じる。幕が閉じたが、幕の前に魔女が出てきて（みんなの町の太陽も奪ってやる）と去っていく。

（執筆者：原田雅）

（2）子どもたちとの対話について

私たちのグループでは、劇の中で子どもたちが楽しむことはもちろんの事、私たちも一緒に楽しめる活動を展開することも大切にしたい。その中で子どもと対面的なコミュニケーションを取るためには、どのように活動的な保育を展開していくのかグループの全員で、こうした方が楽しめるんじゃないか、ここをこうした方が子どもに学びが得られるのではないか、などアイデアを出しあった。様々な兄弟たちがそれぞれの特性にあった内容で、どのようにして会場にいる子どもと対話的に活動できるのか試行錯誤した。劇の内容をみて、兄弟の応援をするだけでなく子どもたちとコミュニケーションをとり子どもたちも参加できるように考えた。

まず、熱々パワーのりんちゃんは、暑い環境や熱い物が好きなため、子どもたち自身が熱いものをつくり、りんちゃんにパワーを届けるようにするにはどうしたら良いのか考え、結果的に手を擦ることで熱くなる動作を取り入れた。ここでの対話的な活動は一番最初に出てくる兄弟のため、流れを把握しその後の活動をは分かりやすく理解出来ることを大切に、子どもが簡単に行える動作と一緒にいかないりんちゃんと少しお話ししながらパワーを貯めることを意識した。りんちゃんが手と手を擦ってみてと自分もその動作をしながら真似をするように促し、「暑くなってきた?」「もっともっと暑くさせてね」など声掛けを大切にしていた。

次にさむさむパワーのなーちゃんは、息をふきかけて温かいものを冷ますような、寒いイメージを持つような動作を取り入れた。息を吹きかけることで、声に出さないコミュニケーションが大切になってくるため、なーちゃんの声掛けや合図が子どもとのコミュニケーションをとる方法になるように行動した。練習ではパワーを「やー」と言って当てる想定をしていたが実際リハーサルや本番では会場の子供たちは「ふー」と言い息を吹きかける動作を行っていた。その時なーちゃんは、その場の雰囲気に合わせて一緒に「ふー」と言っていたので子どもたちと一緒に楽しめる活動になっていた。

次は、食いしん坊パワーのみーちゃんとまーちゃんでは子どもたちが何か動作をするのではなく、みーちゃんとまーちゃんのお手伝いをする形にして子どもとのコミュニケーションを行なった。食べ物を探す場面では2人の兄弟が「どこにあるかなー」「あっち?」「後ろの方はどうかな」と子どもとコミュニケーションを取っており、対話的な活動が出来ていた。ここで、これまで子どもは自分たちが行動して魔女を倒していた、という流れから兄弟の食べ物を探すお手伝いをするという行動をプラスして取り入れることでより劇の流れを楽しめる活動であったと感じる。

次に真似っ子パワーのひーちゃんとちーちゃんは子どもが真似しやすく、みんなが普段園生活で触れることの多い音楽や歌を使って対話的な活動になるようにした。『こぶたぬきつねこ』はどの年代でも聞いたことがある音楽であり、動物のポーズを真似するため動作のイメージが付きやすいのではないかと考えた。音楽を使って真似をする手遊びにすることで、子どもたちと言葉ではない、楽しめるコミュニケーションが取れていた感じる。

最後にキラキラパワーのききとららでは、魔女が暗いのが好きなのできらきらにしてやっつける、という対比を使って子どもたちにもやっつける方法が分かりやすいようにした。ここでも音楽を使い子どもや会場の方々との対話的な活動を行った。

全体を通して、子どもたちと直接的に何か言葉を使つての会話をする事は少なかったが、物語の内容を子どもたちと一緒に楽しみ、動作や仕草でコミュニケーションをとれた劇であったと思う。

(執筆者：塩山花央)

(3) 演出の工夫

今回行った劇は8人の兄弟が魔女から太陽を取り戻す物語なので、物語に欠かせない重要な物のみを制作し、残りの時間は劇の練習に当てた。吊り上げる太陽、おにぎりやお肉、キャンディのみの制作を行った。太陽はまた利用出来るようすぐに剥せるようにした。おにぎりの制作の際には少しでも本物のように近づけたいと思ったが、素材を貼るのに上手くいかず、白紙を使用して制作を行った。お肉も骨の部分が折れないように、中に木材を入れて強度を上げた。8人のそれぞれ持つ能力を見た目からどう表現すべきか考え、衣装から特に伝わるよう登場人物が使う道具や小道具にそれぞれの能力が分かるよう持った。表現方法としては、音楽と効果音はピアノを中心に行った。魔女を倒すシーンでは高揚感を引き出す為に元気で明るい音楽を取り入れ、また、「キラキラパワー」を使う際には静かで、「キラキラパワー」をイメージできるような音楽を選んだ。音楽を強調することで、子どもたちに深い印象を与えることができるようにした。また、兄弟たちがパワーを使用する際に他にも色々な楽器を使って表現を行った。それぞれの能力のイメージにあった楽器を使用し、よりポップな印象を持てるようにした。シーンの構成において、テンポやリズムが観客の感情に与える影響は大きいと考えた。重要なシーンのみみんなの能力をいっせいに当てる場面では音楽のタイミングや、ナレーションの入るタイミングを考え、音楽のリズムに合わせながらそれぞれの能力を当てた。また、物語の進行に合わせて、シーンをどう切り替えるかの工夫も行った。基本的にシーンそれぞれの切り替えはピアノを導入して行った。また、魔女が魔法をかけた際に太陽を隠し、兄弟のみんなが魔女にパワーを当てた際には太陽を少しずつ降ろして兄弟達のパワーが魔女に効果がある事を視覚的に表現した。このように音楽や制作物、小道具からも子どもたちが最初から最後まで楽しめられるように工夫した。

(執筆者：江頭柚希)

(5) 言葉とセリフ

この劇をするに当たって、作る担当、台本を考える担当に分けた。台本を考える役の人がセリフわけをし、台本を作り、それに合わせてみんなセリフを覚えていった。クラスルームを開いて覚えるより、紙を印刷してマーカーを引いた方が覚えるのが早いと話し合い、コピーをし自分のセリフの所に線を引き、何曜日までに覚えてくるように決め、みんな一生懸命セリフを覚えた。

子どもとの言葉のやり取りができるように子ども達に問いかける言葉を多くした。「魔女がいなーい」というセリフで子どもたちが自然と探せるようにし、子どもたちも手伝いながら一緒に劇をしているかのようにできたと思う。それと、みんなも手伝ってくれないかな?」と今からなにかするんだと思わせたり言葉掛けを工夫した。子どもたちに向けてセリフを言う時は大きな声で伝わるようにはっきり大きく言うようにみんな意識した。8人兄弟の1人目、「熱々パワー」では暖かいパワーを貰わないといけないので、手を擦りパワーを貰う。そのときに、手をこすって貰うように促し、もっとパワーを貰うために「もっともっと」と声をかけたくさんのパワーを貰えるように声掛けをした。2人目、「さむさむパワー」では「手を口にあててふーふーして」という言葉をつかって子どもにフーフー息をかけることを伝えた。3人目、食いしん坊パワーでは食べ物を子どもたちに探してもらうことで子どもたちが楽しめる演出をした。子どもたちが食べ物を見つけやすくするために、「後ろとかどうかな?」と声をかけ、探しやすくするように工夫した。4人目、真似っ子パワー

では、「こぶたたぬききつねねこ」のうたしってる？の言葉で、子どもたちに伝わるようにゆっくり歌の名前をいい聞き取れやすいように工夫した。5人目、「キラキラパワー」では、この歌知ってる？と聞くことで子どもたちの反応を見れるようにした。

(執筆者：青柳光莉)

(6) 動きと身体表現

劇をする中での動きや身体表現の工夫は、子どもたちの想像力や表現力を引き出すために重要である。劇では、表情や身体の動きを通じて感情や状況を表現することが求められる。お互いに見せ合いながら、意見を言い合いながら、アイデアを出し合いながら、試行錯誤しながら、表情や身体の動きの練習を行う機会を設けることで、より自然な表現力を身につけることができたと思う。その中で、チームワークの促進を大切にしたい。劇をするには、チームワークが不可欠であると私たちは考えていたため、それぞれ役割や役柄を全うし、それぞれが協力しながら劇を進めるようにした。

講堂は実際に練習をしていた教室よりも大きく声も届かないため、通常の教室での練習から、子どもたちに動きがしっかりと見えるよう大きく身体を動かすように工夫した。声も届かないと意味がないと考え、それぞれ頑張った。

「子ども(村人)」役では、泣いているシーン、8人兄弟を見て不思議そうにするシーン、兄弟を応援するシーン、喜んでいるシーンなど、見ている子どもたち側の反応を表現していると思うので、動きを大袈裟にしながら身体表現する工夫をした。「あつあつパワーのりんちゃん」では、手を大きく前に出しながら手を擦り合わせ、だんだんと熱くなっていく感覚を子どもたちと一緒に味わいながら楽しんだ。熱くなってきたパワーを「りんちゃん」らしく元気いっぱい全身を使いながら魔女に当てる工夫も施した。「さむさむパワーのなーちゃん」では、子どもたちにも伝わるような日常で使う例えを伝えながら、手を口に当てフーフーと身体も使いながら子どもたちとパワーを集めた。寒い仕草も取り入れながらキャラクターを表現した。「食いしん坊パワーのみーちゃんとまーちゃん」では、お互いに息を合わせ、食べ物を探す仕草や食べる仕草、美味しい気持ち等を飛び跳ねたり身体を曲げたりなど、前日まで試行錯誤を繰り返しながら全身を使って楽しさを表現する工夫をした。「まねっこパワーのちーちゃんとひーちゃん」では、子どもたちと一緒にまねっこ遊びを楽しめるよう、2人で何度も練習を重ね動物を大きく表現する工夫を施した。ピアスの音や速さに合わせて2人で動きを合わせることは簡単なことではなかったと思うけれど頑張った。「キラキラパワーのキキちゃんとララちゃん」では、それぞれ衣装も対称に合わせ、全身を使ってキラキラパワーを表現することを頑



張った。身長もあまり変わらないため、首を傾げるシーンやパワーを当てるシーンの時動きや大きさを合わせる工夫をした。「魔女」では、苦しむシーンやまだまだだよ～！としぶといシーン等を全身で表現する工夫をした。魔女が1番この劇の中で大事な役割だと感じていたけど、その表現力の凄さを感じた。魔女が色々な場所から登場するように設定したため、場所移動を頑張った。パワーを食らうシーンでも、身体がダメージを受けてボロボロになる魔女を倒れたりフラフラになったりしながら表現した。

(執筆者：田中くるみ)



(7) 音と音楽

著作権の関係で使用する音楽が変わったり、みんなで合わせながら通していく中で弾く部分が変更したりして、その都度話し合いながら決めた。また、「○○パワー」の後の効果音では、元々ピアノで全てする予定だったが、「楽器を使った効果音はどう？」という意見がでた。効果音は楽器を使ってパワーごとに変えることができた。最初のジングルベルでは、全て弾く予定だったが、サビ前までにし、村人役の人達が音楽に合わせて動いてくれた。バイキンマンの歌で魔女が登場するシーンでは、悪役を連想させる音楽を使って子どもたちのワクワク感を引き出すことができたと思う。サンタが街にやってくるでは兄弟の登場シーンで使われ、みんなの行進する足に合わせやすいような楽譜を選んだ。みんなで更新する足を揃えて、かわいい感じの登場シーンを演出することができた。再び魔女が登場するシーンでは、バイキンマンの歌ではない怖い音楽を演奏するために、話し合ってたくさん検索をし、怖いと感じさせられるようなBGMの楽譜を探し出した。そのBGMのおかげで、また魔女が来る！という子どもたちのワクワク感を再び引き出せたと思う。こぶたぬきつねこの歌では、まねっこであるひーちゃんとちーちゃん役の役割をわかりやすく表現出来ていたと思う。また、一度歌ったあとスピードを早くしたのも良かったと思う。キキちゃんララちゃんのきらきら星では、「きらきら星って言う歌があるんだけど」とララちゃんが出たあとピアノできらきら星を弾く予定だったが、鉄琴を使いきらきら星を演奏し、可愛い感じに出来ていた。兄弟みんなで集まりきらきら星を歌い、協力し合って最後のパワーを溜めるという演出も完璧だったのではないかなと思う。サンサンたいそうでは題名である「太陽をとりもどせ」に基づき、題名にあった音楽だったのではないかなと思う。さらに戦いのシーンにあったBGMを選ぶことが出来ていたと思う。最後のさんぽでは、兄弟みんなの仲の良さをアピールできていたのではないかなと思う。とても可愛いと思った。

(執筆者：宮崎穂乃香)

(8) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

私たちが登場する前に魔女の服をみた園児が保育者に「魔女がいる！」と言い、「次はどんなお話だろうね」と楽しく話をしながら待っている姿が見られた。王様と九人の兄弟を題材とし、実践していく中で、騒いでいる園児たちもいたが基本的には劇を真面目に見ている園児が多く、劇の内容の中で、問いかけるシーンを多く取り入れており、答えてくれるか不安もあったが、園児同士で意見を出したりしてしっかり多くの園児が答えてくれた。魔女が太陽を奪ってしまいその太陽を子どもたちに取り戻すよう伝えるのだが、太陽がなくなってしまう暗くなるのを電気を消すなどして工夫したのだが、その時の子どもたちの反応は驚いており、子供同士で「どうする？」と話し合っている園児もいた。食いしん坊のまーちゃん、みーちゃんの前にお肉をもってきてもらうシーンでは、子どもたちに食べ物を探してもらうところから始まるのだがこの時にも子どもたちに問いかけると食べ物がある場所に元に戻って教えてくれる園児や指をさして教えてくれる園児もいて、多くの子どもたちが率先してみんなで見つけたお肉を食いしん坊の前を持ってきてくれる様子が見られた。「みんなありがとう」と声をかけた際には「いいよ！」と受け答えができており、「聞く力と話す力」の成長発達を感じた。講堂で練習した時には、セリフをある程度覚えた上で通しながら足りないところやもっと良くするためにどうするかなど先生にアドバイスを頂きながら試行錯誤し、改善した。本番では笑顔で元気よく声を出して行ったが、緊張からかセリフが飛んでしまったりする事もあった。その時はアドリブであったり、友達同士でセリフを教えあったり助け合いながら劇を終えることができた。最後の歌を歌う場面では散歩を歌ったのだが、子どもたちも一緒に立って楽しく歌っている様子も見られた。私たちが前に立って手を繋ぎ、歌を歌っている姿を見て子どもたちも手を繋ぎ歌っているところが見られて、目で見たものを真似する子どもらしさも見られた。

(執筆者：山崎麻奈加)

(9) 取り組む過程での改善と工夫

「王様と九人の兄弟」の物語は、それぞれ特別な能力を持つ兄弟たちが、意地悪な王様に立ち向かうというテーマを持っている。そのテーマの下、劇の流れを考えた。しかし、現代の子どもたちにとって、「王様」というのは綺麗やかっこいい、正義の味方というようなイメージが強く、「意地悪な王様」という設定はイメージすることに難しさを感じるのではないかと考えた。そこで、「王様」から「魔女」に登場人物を変更した。「魔女」は「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」の童話でも意地悪な性格で馴染みがある。そのため、「魔女」に変更することで劇を理解しやすくなると考えた。

「兄弟」の能力は、絵本では「ながすね」や「みずくぐり」など難しい表現のものが多かった。そのため、子どもたちにとって分かりやすく且つ身近に感じられるものに変更した。

元々、太陽を盗まれ野菜が育たなくて困ってしまうという村人役を作っていたが、「暗くて遊べない、怖い」という気持ちを持った子ども役に変更した。それにより、子どもたち自身の経験から劇の子ども役に共感しやすくなり、より劇に参加しやすくなると考えた。

プレ発表から、子どもたちの「魔女」に対する反応が大きいことが分かった。そのため、子どもたちが「魔女」と関わる機会を増やすことにした。「兄弟」が「魔女」にパワーを当てる場面で、「魔女」はステージの外に隠れ、子どもたちが「魔女」を探するという活動を加えた。劇の展開に主体的に参加できるように工夫した。また、みんなで力を合わせることで、具体的にはパワーを当てることに楽しさを感じている様子が見られたため、「兄弟」がパワーを溜める場面では子どもたちのパワーも一緒に溜めるように変更した。「兄弟」にパワーを送るという形で参加できるように工夫した。子どもたちと劇のキャラクターとの一体

感を高め、みんなで「魔女」に立ち向かうことで協力する大切さを楽しみながら味わえるよう改善した。

劇の最後では、「さんぽ」を歌うことで太陽を「魔女」から取り返し、いつもの楽しい日常に戻ったことを演出した。また、幕が閉じた後に「魔女」を登場させ、ドキッとするような言葉を残すことで「まだ物語は続くのかな？」という余韻を促した。歌、魔女の言葉かけを用いたことで子どもたちが劇を最後まで楽しみ、ワクワクとした気持ちで終わられるように工夫した。

(執筆者：二井田直央)



(10) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

実戦本番では、予想以上に客席にいる子どもの人数が少なく、1人ひとりのパワーを集めるために子ども達に協力してもらおう際の反応が薄かったらどうしようと不安になっていたが、前日のリハーサルの時の学生の反応を参考にしながら、本番ではリハーサルよりも大きな声でセリフを言うようにし、一緒にパワーを集めてもらえるようにそれぞれが臨機応変に対応しながら子ども達とのやりとりを大切にできるように工夫した。子どもたちも私たちに合わせて魔女を呼び出す時に「出てこーい」などの掛け声をしてくれ、魔女が登場した時には怖がっているような様子も見られ、劇に集中してくれていたように感じた。1人ひとりのパワーを集める時には、最初は恥ずかしそうにしている、パワーを送らずに見ているだけの子どもが多かったが、保護者や先生方がお手本を見せながら子どもたちと一緒にパワーを送ってくださり、あつあつパワーの時には積極的に手を擦りながらパワーを集めてくれ、さむさむパワーの時にもふーふーと息を吹きかけながら寒いパワーを集めることを楽しんでいるような姿が見られ、兄妹が登場しパワーを集める度に、段々と子どもたちの笑顔が増えているように感じた。食いしん坊パワーの時には、子どもたちだけでなく保護者や学生などの笑い声が聞こえたり、まねっこパワーの時には「こぶたためききつねねこ」の伴奏に合わせて子どもたちも元気よく歌い、楽しそうに踊りも真似していた。最後にキラキラパワーでも、子どもたちは大きな声で「きらきら星」を一緒に歌ってくれて、積極的に劇に参加してくれていたように感じた。個人的には、魔女がいなくなりどこに行ったのかなーと探す場面で、子どもたちが「あっち!」「そっちにいるよ!」など声を出して教えてくれたので、1

番その場面で子どもたちが楽しんでくれているように感じたため、魔女に対する反応が大きいということを加味しながら、そのような演出を工夫して良かったと感じた。

(執筆者：桑野夏凪)

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【中井春菜】

今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びはどれだけたくさん練習を繰り返しても本番では練習通りにはならないことがあり、状況に合わせてその場にあった対応をすることの重要性を改めて感じることができた

。練習をしている時に本番での子ども達の様子を想像しながら練習をしていたけれど、本番で実際に見に来てくれていた人たちの前で劇をしてみるとこちらが予想していた反応とは違う反応があることあった。私たちのグループでは見に来てくれる人たちの反応も含めて1つの作品となるように考えていたためより、見に来てくれた人たちの反応がより重要だと感じることができたのだろうと思う。私たちのチームは本番で予想していた反応とは違う反応があったとしても臨機応変に対応して一人ひとりがより良い作品となるよう充分に努めることができたと思っている。臨機応変の対応の一部として今回私が特に重要だと思ったことは「間（ま）」であると思った。同じセリフでも間によって聞き手の捉え方が変わる事を実感することができた。例えばそれぞれパワーの違う妖精さん達の自己紹介をする時「私は〇〇パワーの☆☆！」とスラスラと区切りなく発した場合と「私は、〇〇パワーのっ！☆☆っ！！」と間を空けることで強調したいところを相手が聞き取りやすくなったり伝わりやすくなったことにより重要な部分がわかりやすくなり印象的に残りやすくなった。また間があると、自分の気持ち的にも落ち着いてセリフを言うことができ余裕を持つことができるようになると感じた。「間」と同じくらい重要だと感じたことは、セリフに抑揚をつけるということだ。自分達が演劇を行っている時ではあまり気にならなかったけれど聞き手になった時にセリフに抑揚がある人の姿は自然と耳に入ってきてとても魅力的に感じた。私たちの演劇は有難いことに「とてもよかったよ！」とたくさんの人達に褒めてもらうことができた。これは一人ひとりが練習を重ねることにより良い作品にしたいと言う思いから自然と「間」や「抑揚」をつけることのスキルを身につけることができていたのだろうと思う。このスキルは今回の演劇の舞台上だけではなく、私たちが保育士や幼稚園教諭等になった時にでも凄く必要となるスキルだと思う。私たちはこれから様々な場面で人の前に立つ機会が増える。その時に自分から相手に対して一方的に内容を話すだけになってしまうような自分主体の「伝える」ではなく、自分の伝えたいことがきちんと相手と通じ合うことができている状態で主体が相手の「伝わる」「伝わっている」と言う事を意識していきたい。そのためにはどのようにしたらいいかな？と考える力が私たちにはある事を今回実感できたので今後継続して活かしていきたい。

【二井田直央】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもが主体的に参加できる環境設定の重要さだ。

劇の流れはあるが、子どもが物語に関わる機会を細かく取り入れることで、学生主体になることがないように意識した。その結果、物語のキャラクター（学生）と子どもたちとの一体感を生むことができたと感じている。

また、キャラクターと子どもたちがやりとりしやすい雰囲気作りにも徹底した。プレ発表の際、キャラクターの動きや言葉に反応する子どもたちがいた。そのため、本番ではその反応にキャラクターがしっかりと応えることを意識した。その結果、物語と子どもたちとの壁を無くすことができた。本番では劇が進んで行くにつれ子どもたちの声が大きくなり、言

葉も増えていった。これは、キャラクターが子どもたちの言動に応じたことで、安心感や嬉しさを子どもたちに与えることができたからだと考える。

子どもが主体的に参加できるためには、私たちの関わり方が大きく影響していることを知った。この学びから、生活の中の様々な場面で子どもが安心して自分らしく行動できる環境を作ることができるように、工夫を重ねていきたいと思う。

【桑野夏凧】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、臨機応変に対応することの難しさだ。練習をしている時には、子どもが主体的に参加できるような劇にするよう心がけていたため、子どもとの関わりや一緒に協力してパワーを集めるような場面を多く作っていたが、本番前には客席に来てくれている子どもの人数の少なさに焦り、劇本番では予想していたよりも子ども達の反応が薄かったりなどの想定外のことが起こり、どうしたらいいか分からなくなったが、同じチームのメンバーは台本通りにセリフを言わずに、子どもたちが返事をしやすいような言い方に変更したり、練習よりも大きな声でセリフを言うなど、臨機応変に対応することが出来ていた。しかし、私は緊張や焦りから台本通りにそのままセリフを言ってしまったり、早口になってしまったり、棒読みになってしまったりして子どもたちの様子に合わせて臨機応変に対応することが出来なかった。幼教こども劇場を通して、臨機応変に対応することの大切さを学ぶことが出来、自分の反省点や改善点も見直すことができた。今後保育者になっていく私達には臨機応変に対応することはとても重要で求められることだと思つたため、今後も努力を重ねていかなければならない部分だと改めて感じる事が出来た。この反省点を今後活かしていきたいと思う。

【立山凧】

今回の幼教こども劇場を通しての学びは、どんなに練習をしていても、本番では練習通りにいくとは限らず、その場で臨機応変に対応することの大切だと思った。練習の際は、子どもたちと一緒にパワーを集めて、一緒に魔女を倒し、会場に来てくれている人みんなで楽しむ前提で何度も様々なシュミレーションを考えながら、頭でシュミレーションしながら行っていました。しかし、本番では思っていた以上に子どもたちの人数が少なく私は、1番目のパワー役だったため子どもたちの反応も分からずどうしたらいいんだと焦りました。だけど、少なかった分、目の前のぬ子どもたちとたくさんコミュニケーションを取ることができ、子どもたちの反応を見ながらパワー集めるんだけど一緒に集めてくれる？暑くなってきた？魔女どこにいるかわかる？と色々な問いかけをしながら行うことができた。たくさんコミュニケーションが取れた分、一緒にパワーを集め魔女を倒せた達成感がわたしにも、子どもたちにももてたと思う。こども劇場を通して、その場その場においても、子どもたちにおいても毎日変化があるため、臨機応変に対応できる力がとても必要だと学びました。

【江頭柚希】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びはどのようにすれば子どもたちが親しみや興味を持ってくれる作品を制作する事が出来るのかである。準備の過程では、まず、いかに子どもが好んでくれるストーリーにするのかを考えた。子どもには戦い系のストーリーは好まれると感じた。なので、「魔女を倒す」というストーリーで行う事にした。ここからまず、ストーリーは難しくなく、1つの目的を明確にできているのでストーリー制作は子どもの興味、親しみを持ってくれるだろうと考えた。どのような形で子どもたちも参加してもらおうか色々な案が出たが、時間と子どもたち、私たちの人数を考えた結果パワーを一緒に集めて倒す形になった。子どもたちが楽しめるかイメージしてみた時は不安だったが、実際子どもたちも一緒にパワーを集める為に協力してくれていた。兄弟達皆が一生懸命になっていたからこそ、子どもたちも楽しく参加してくれていたのだと考えた。このようにどれだけ身近で

子どもたちの視点を重視したテーマであるか、ユーモアと楽しさを加えられるか、また、視覚的に魅力を持てるのかが、子どもたちが親しみや興味を持ってくれる作品を制作する事が出来るのかにつながるのだと感じた。

【青柳光莉】

劇場での最大の学びは、劇をする学生と子どもたちも参加して楽しんでいるか。劇をする学生も楽しむこと。だと思った。準備過程では子どもたちと一緒に楽しめる劇はなんだろうと考えた。「王様と9人の兄弟」の絵本から想像を膨らまし、9人の兄弟で魔女を倒す。そのキャラクターを子どもたちが分かるキャラクターにし、パワーを考え子どもが楽しめる劇を考えた。

実際に練習で劇をしてみると、みんなの前で劇をする恥ずかしい気持ちと、セリフが飛び、思った以上に緊張していた。自分がこのままだと子どもたちは楽しめないと思い、恥ずかしさを捨て、セリフが飛んでもアドリブで言葉をいい、笑顔でいることを心がけた。

本番、思ったよりも子どもたちの人数が少なく「大丈夫かな」と心配したがその少人数の子ども達と一緒に歌やパワーを集めている姿をみて、ほっとした。子どもたちを楽しませることだけではなく自分自身も楽しむことが大切だとこの劇を通して感じた。

【堤乙華】

今回の幼教こども劇場を通して、最大の学びは子ども達に「楽しい」を伝えるには、大人も子ども達と同じように、全力で子ども達と同じように自分達も楽しむ事が大切だと感じた。大谷幼稚園にプレ幼教こども劇場をしに行った際、初めはやはり自分の中で恥ずかしさがあり役になりきれていない部分があった。魔女がやられるシーンでは数人の子ども達が私を見て「全然やられてないじゃん！」と声が聞こえていた。しかし、子ども達は物語の世界観に浸っている子が多く、「でもまだまだだよーん！」というセリフがあり、繰り返している予定が無かったが、子ども達から「まだまだだよーん！」と自ら声を出してくれた。自分がやりきれていない子ども達からの反応で、ここはこうしたらもっと楽しんでくれる、意外とここがウケたなと本番に活かすことが出来た。実際にそれを取り入れ、大人でもクスツと笑いが聞こえるような劇場にする事が出来た。リハーサルでうまくいかなかったり、改善すべき点をしっかり皆で話し合い、本番はとにかく恥ずかしがらず全力でやろう！という気持ちで皆と、すごく楽しい劇場を披露する事が出来た。見てる人も演じる側も笑顔で楽しくする為には、恥ずかしさを捨てる事も大切だなと改めて感じた。

【塩山花央】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもと一緒にやりたい、したいと思う遊びをつくり子どもが自主的に主体的に行動できる環境を作る事の大切さである。準備の過程では、私たちの大人目線からこのようにしたら子どもは楽しめるのではないかと様々な遊びを考えたが、実際リハーサルや本番では子どもが楽しんでいる場面や面白いと声をあげて笑っている場面は私たちの考えた内容とは違いがあった。魔女をやっつける為の行動が楽しめるのではないかと考えていた。実際大谷幼稚園で行ったリハーサルでは、もちろん考えた場面でも子どもたちは楽しんでいて、他に魔女の「まだまだだよ」という言葉が子どもにとって面白かったようで繰り返しその言葉を子どもが言っていた。リハーサルのことを生かして今度は会場で行う本番では、魔女がなかなかやられることの無い場面を作るように、物語の内容を変えた。しかし、実際会場に来た子どもたちは少なく思った反応をもらうことは出来なかったが、兄弟たちが子ども一人ひとりとのコミュニケーションを大切に、「あつくなってきた？」「どこにあるかな？」「魔女を探してみよう」など様々な声掛けを行っていたので、子どもたちも自分たちで探す行動をとったり、兄弟にパワーをためる行動をとったりと、子どもが主体的に動いている場面もあったので良かった。改善点としては、子どもの人数が少なかった場合ステージの上からではなくステージをおりて目の前に来て、

子どもとの対面的なコミュニケーションをとるなど、工夫が必要であった。また、少ない人数で出来る、ステージに上がりたい子どもがいれば一緒に行くなどの事も少ない人数ならでは行えた事だと思った。

【田中くるみ】

今回の幼教こども劇場を通して、みんなで何か一つのものを子どもたちのために準備することの大切さや難しさ、楽しさを学ぶことが出来た。それぞれキャラクターを設定し、お互いに意見を言い合ったりアイデアを出し合ったり励ましあったりしながら本番まで頑張った。本番では、みんな恥ずかしがらずに子どもたちの反応を見ながら「楽しい!」「面白い!」を伝えられたのではないかなと思う。子どもたちが沢山笑ってくれたりこちらからの声掛けや関わりに応えてくれる姿が見られ、頑張ってよかったという気持ちでいっぱいになった。子どもたちが物語の世界に入り込み、世界観を楽しめるような工夫を沢山考え、試行錯誤し、頑張れたことが最大の学びだったと思う。その中で、自分たちが一番楽しむことも大切にしていた。私たちが全力で楽しむことで子どもたちにもその楽しさが伝わって貰えたらなと思って、楽しむことを大切にした。劇を進めていくと、子どもたちの体がだんだんと前に来ていたり、声を出したりワクワクしてくれたりしていて、物語の世界に惹き込めている気がしてとても嬉しかった。

【宮崎穂乃香】

今回の幼教こども劇場をやってみて、みんなで「ここはピアノはこうの方がいい」「ここはこういう動きをした方がいい」など、それぞれが劇が良くなるようにたくさん話し合うことができた。8人の兄弟がさまざまな個性を出しながら劇をすることができたと思う。子どもたちに対して「暑くなってきた?」や「きらきら星って言う歌知ってる?」など、子どもたちとのやりとりも出来ていた。最初はみんな恥ずかしそうにしている緊張していたが、本番では子どもたちの反応を見て、臨機応変に対応することが出来ていたと思う。子どもたちの反応を見て臨機応変に対応するのは大切なことだと思うからこれからの保育に活かしていきたい。魔女が兄弟からパワーを当てられ、「まだまだだよ~」という所では、子どもたちが笑顔で笑っていたので、良かったと思う。さらに、魔女を探す場面では、子どもたちが楽しそうに「あっち!」「そっち!」と反応してくれていた。普段あまり話さない友達ともたくさん話し合うことができ、劇を通して仲を深めることができたと思う。

【原田雅】

この幼教こども劇場を通して友達同士で協力してひとつのものを作り上げることの大切さを学ぶことが出来た。最初は絵本を考えるとところからだった。絵本はすんなり決まった。劇で使う道具を作ったりセリフを考えたりすることはみんなでしたけど難しいと感じた。セリフは子どもたちが楽しめるような言葉をどんなものだろうと考えたり、みんなで劇を通してやっていく中で（ここはこのセリフに変えた方がいいんじゃない?）と話し合いながらより良く進めることが出来た。授業の時間配分も上手に使うことが出来て授業以外で時間を使ったりせずに行うことが出来た。当日は午後で子どもたちが少なくてやりづらいと感じたけど、子どもたちに（お肉どこかなー?）と言うと（あっちー）と答えてくれたりして良かった。子どもたちの反応を見ながらセリフを上手に変えたり子どもたちに合わせて臨機応変に対応することが出来た。劇をしてみて友達との仲も深まり、今まであまり関わったことの無い友達とも仲良く話すことが出来た。

【平川千愛凜】

今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは、1つのものを初めから作って完成させる難しさを学ぶことができた。まず絵本をどの絵本にしてどのようなエピソードにするか、子どもたちにどんなことを楽しんで欲しくてどのような動きを入れるかなど考えてさまざまな

ことを考え巡らすことが必要だと学ぶことができた。さらに、私たちが練習の時から子どもたちの様子を沢山予想して練習していたが、本番はあまり子どもの反応がなかったり、予想していたことではない反応だったりしたので臨機応変に子どもたちと関わり、子どもの反応を拾ってセリフを臨機応変に変えて子どもと対話し、関わるのが大切だと学ぶことができた。このことを活かして4月から働き出したときに子どもたちの反応を大切にして、臨機応変に保育していきたいと思った。

【山崎麻奈加】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、見るもので子どもたちを楽しませる難しさ、臨機応変に対応することの大切さを学ぶことが出来た。私たちがした劇は子どもたちと一緒に何かしたりすることはなかったため、見て楽しいと思ってもらうためにはどうしたらいいのかと考えた時に1番は劇をする自分たちが楽しまなければ子どもたちにも伝わらないし楽しくならないと思った。笑顔を心がけながら、子どもたちと受け答えする場面を多く作ったりするなどの工夫をした。また8人の兄弟の中でも同じキャラクター同士で意見やアイデアを出し合い、よりもっといい劇になるように試行錯誤しながらセリフが飛んでしまったり忘れた場合には助け合うなどさまざまな個性を出しながら劇をすることができた。本番ではプレ幼教の時とはガラッと変えたジャンルでしたが、それもまた違う面白さや楽しさがあるって見ている方も楽しめたのではないかなと思う。緊張もしたし恥ずかしい気持ちももちろんあったけれど恥ずかしさを捨てることも大切であるということや、セリフが飛んでしまった時もその時の子どもたちの反応や雰囲気によってアドリブで変えたり臨機応変に対応する難しさや大切さを知ることが出来た。練習を沢山してきたからこそ、最後まで劇を終えることができた喜びはすごかったし、今後働きだして似たようなことをしていく時には、この幼教こども劇場で感じたことやできたことを活かしていきたいと思う。

